

## 『スポーツビジネス最強の教科書』平田竹男著 マネー著者行間を語る

2012/12/20 7:00 | 日本経済新聞 電子版

共産主義の米国、自由競争の欧州。スポーツビジネスは一般ビジネスのイメージと正反対。

そもそもなぜ野球にはドラフト制度が存在するのか？ サッカー界からは考えられない。各球団が自由に選手を獲得すれば良いのではないか。

経営破綻を未然に防ぐ。戦力を均衡させる。勝っても負けても儲かるように仕組む。それが目的だが、一方で、降格がないので横浜DeNAベイスターズのような万年最下位でも許される。

プロ野球は米国の制度を輸入した。それが機能不全。20年前日米のプロ野球のビジネス規模は同じだったが、現在は5倍の格差。なぜなのか？ 一体米国は何をしたのか？

自由競争の欧州。これはひどい。

サッカーに熱狂するスペイン。レアル・マドリッドとバルセロナの経営は簡単に政治をも動かす。ベッカムなど海外から有名選手をかき集める。7つの海を支配し戦利品をスペインに。そのために税制など変えてしまえ。「ベッカム税制」の成立。ギャラクシー軍団の財源はクラブの収入からではなく、政府の取り分を減らす。

財政難に陥った昨今のスペイン。さすがに「ベッカム税制」は廃止。ではメッシはどうなるのか？ さすが、スペイン。メッシは手放さない。10年以上住んでいれば以前のまま。ユーロ危機の真っ只中でも「メッシ税制」がまかり通る。

ことほどさように欧州は欧州チャンピオンズリーグで勝ち進めば巨額の分配金。そこにクラブの、そして国の威信をかける。

そこにはむごい自由競争あるのみ。経営破綻の未然防止だ、戦力均衡だとかそういうヌルい話は微塵(みじん)のかけらもない。

弱い奴は降格あるのみ。強い者だけが分け前にありつける。

イングランド、スペインの競争に押され、テレビマネーもそこに集中。イタリアもジリ貧。ではドイツはどう対抗するのか？ まさか税制を変える国ではあるまい。有名選手が取れないのでテレビマネーも難しい。何と正攻法に出た。

ドイツW杯後の新しいスタジアムを活かし、チケット販売にも工夫を加え、観客動員数で欧州一の座を獲得。入場料収入を基軸としたクラブ経営というまさにJリーグの垂涎(すいぜん)の的であるドイツ方式を確立。さらに、労働移転の自由というユーロ原則にも挑戦。ユーロ域内は自由でそれ以外の外国人を制限するた



『スポーツビジネス最強の教科書』(東洋経済新報社)

めに英国人選手のいないイングランドクラブを揶揄(やゆ)。ドイツ人選手を最低12人雇用すれば、後は自由。いわばポジとネガをひっくり返したルール。ドイツはオーケストラでも同様のやり方を持つ。

これが日本には革命的な影響を与える。これまでユーロ域外選手の人数制限のため、なかなか移籍できなかった日本人選手だったが、ドイツ人以外なら域内も域外も同じ扱い。1年契約ばかりで移籍料がゼロのJリーガーには断然競争力がある。細かいテクニクがあり、チームのために精勤する日本人がドイツには合う。瞬間に香川、長谷部はもちろん、内田、岡崎、清武、細貝、乾、宇佐美、2人の酒井。全員が活躍。親日的なドイツファンにも助けられ、これからも日本人選手は増え続けるのではと期待できる。

このように、世界で繰り広げられるスポーツをめぐるビジネスモデルの対決。

実は日本は、世界的に不思議な国。米国モデルのプロ野球と欧州モデルのサッカーが共存する。

この異質な2つのモデルを日常として受け入れる日本には、新たなビジネスモデルを生み出す最強の土壤がある。願いも込めて、本書のタイトルを「スポーツビジネス 最強の教科書」と名付けた。

本書は、リーグ構造、クラブ経営、メディア、スポンサーなど、スポーツを取り巻くビジネスを俯瞰(ふかん)的に理解するための教科書である。新しい学問領域であるが、今や170を超える大学に学科やコースが存在する。夢を与える産業として発展させたいが、本書がその道に向かって貢献できれば幸いである。

平田竹男(ひらた・たけお) 1960年、大阪生まれ。横浜国立大学経営学部卒業、ハーバード大学J.Fケネディスクール行政学修士、東京大学工学博士。1982年通商産業省(現経済産業省)入省。在ブラジル日本国大使館一等書記官、通商政策局資金協力室長等を歴任。2002年日本サッカー協会専務理事に就任。なでしこジャパン誕生や女子サッカー、フットサルの普及に尽力。2006年からは早稲田大学大学院スポーツ科学研究科教授。主な著書に、「サッカーという名の戦争——日本代表、外交交渉の裏舞台」(新潮社、新潮文庫)、「トップスポーツビジネスの最前線」(講談社)、「野球を学問する」(桑田真澄との共著、新潮社)、「なでしこジャパンはなぜ世界一になれたのか?」(ポプラ社)など多数。

